

日本の未来の形

江澤 雄一

●東洋学園大学理事長

最近、大学の先生方から、学生の勉強へのモチベーションが低いという嘆きの声を聞く。希望の大学に入学していながら、自分が何を学びたいのかわからない学生が多いという。そして、「親から言われるから、親のために大学に来ている」と答えてはばからない学生もいるようだ。

大学の全入時代を迎え、入試のためにたいした苦勞をすることもなく入学できることが影響しているのは事実だ。確かに、何ひとつ不自由のない社会で、何のために苦勞して勉強しなければならぬのか、と思う学生もいるだろう。また、大学の授業が自分の関心に十分応えてくれないという不満もあるかもしれない。

しかし、その一方で、「企業金融」を講義する実務界の先生がライブドアや楽天の話をすれば、大教室が学生でいっぱいになることも事実である。ライブドア事件は証券市場のあだ花だったが、学生たちは日本の経済に新しい流れが生じていることを敏感に感じており、それが彼らに夢を与え、関心を呼び覚ましたと言える。

このような状況のもとで、学生たちにモチベーションを高めさせるためには、日本社会の将来展望を示し、彼らに努力目標を与えることが必要ではないか。変化が激しく、先行き不透明な

現代にあつて、学生や若者たちは自分たちの将来像を描くことができず、右往左往しているのが実情だと思う。

日本経済は、バブル崩壊後十五年の間に、価格破壊、企業リストラ、銀行再編、国営企業民営化などの構造改革が進み、デフレ脱却の見通しも立ってきた。海外から見ると、双子の赤字に悩むアメリカや構造改革の遅れたヨーロッパに比べて、日本経済の復活には大きな期待が集まっている。

このように好調な経済を背景として、日本は世界における自らの役割を再認識すべき状況にあると思う。日本の国

づくりが一応の成果を上げ、アジアにおける先進国としての地歩を築いたいま、わが国は世界の中でリーダーシップを発揮する力を備えるようになったのではないか。

「ソフトパワー」という言葉がある。世界の国々は、軍事力や経済力だけで評価されているわけではない。その国の文化価値、政策判断、人間力発揮などにより、国際社会で存在感をもち、影響力を行使できる国がある。日本は、軍事力に頼らず、ソフトパワーの面で世界に貢献できる可能性をたくさんもっていると思う。

例えば、環境立国という考え方は重要だ。日本には四季折々の美しい自然がある。そして、自然と共に暮らすことに喜びを見いだす伝統文化がある。地球環境を守るため、日本が中心になって京都議定書をまとめた実績もある。省エネ、公害対策、新エネルギー開発など、環境技術の面では日本は世界最先端の水準を誇っている。これらの成

果を活用すれば、日本は環境分野で目覚ましい国際貢献ができるはずだ。

また、開発途上国の教育支援は、日本の過去の経験を生かすことができる分野かもしれない。明治以降の日本の教育が今日の経済的発展をもたらしたことを思い起こし、途上国の子どもの教育向上に手を差し伸べることは重要である。日本の支援で建設されたカンボジアの学校で、日本の若いボランティアが学校の運営に参画し、また、日本語を教えたりするのを見ていると、こういう国境を越えた人間と人間のつながりが、日本の将来にとって貴重な財産になるということをつくづく実感する。

思いつくままに、いくつかの例を挙げた。日本の中で内向き志向になるのではなく、世界の中の日本という視点に立って考えると、次の世代の若者が活躍できる場は限りなく広がっていくと思う。

学生たちのモチベーションを高めた



い。ニートの若者にも働く意欲をもたせたい。そのためには、日本の未来の形を示し、彼らの活躍の場が大きく広がっていることを教える必要がある。日本が世界の中で存在感のある国となり、日本人として活躍することに誇りをもてるようになったとき、彼らはその若い情熱を勉学や仕事に注いでくるだろう。大学の役割は極めて重要である。若者に夢を与え、その夢の実現のために努力させること、それが教育の最終的な目的であると思う。